

田中善信著

『芭蕉新論』

佐藤信一

長年、白百合女子大学で教鞭を執っておられた田中先生の近著である。まず、目次を掲出しおきたい。

はじめに

芭蕉の開眼

芭蕉自筆自画『甲子吟行画卷』の成立年次

『おくのほそ道』の用語と用字

曾良本『おくのほそ道』の補訂について

中尾本『おくのほそ道』における誤記の問題

櫻井武二郎氏紹介「新出猿蓑歌仙」の検討

「鶯の羽歌仙」成立の時期

『本朝文選』所収「松嶋ノ賦」について

伝芭蕉写「蘭太暦」の書写年次

芭蕉偽簡考―工山宛・昌房宛など

芭蕉書簡の検討―貞享四年四月三日付桐葉宛書簡

芭蕉筆跡学への展望

芭蕉の作品における暦の問題

芭蕉と宗七

芭蕉と宗七（補遺）

芭蕉の深川移住―横浜説の検討―

芭蕉の老後

芭蕉晩年の苦惱

『深川』注釈―「青くても」の巻―

鶏肋編

芭蕉と漢詩文 許野消息 路通の新資料 乞食路通 沈黙

する蓑 心のあはれなる尼 汚泥の中に落ちた男 芭蕉と

どらたち 自筆本『おくのほそ道』の行方 芭蕉の明月の

句 贋作の時代

あとがき

人名・書名索引

「はじめに」で、田中先生は「私の仕事の基本は従来の通説を検証することであった。本書もその基本線以上の仕事を継承するものである」とされ、さらに「先学の業績を検証する作業が必要」とする。田中先生の研究に対する姿勢を物語るものであろう。

「芭蕉の開眼」では、「道のべの木槿は馬にくはれけり」が蕉風開眼の句とされているが、そのことを学問的に検証することを試みる。「芭蕉自筆自画『甲子吟行画卷』の成立年次」では、成立年次を推定するのに字母が重要な手掛かりとなっている。「おくのほそ道」の用語と用字」では、「おくのほそ道」の文字は芭蕉の文字の癖や誤記が多いとされるが、辞書も参考書もない状況下ではやむを得なかったことを述べる。「曾良本『おくのほそ道』の補訂について」は、補訂に用いられた見せ消す

の記号や筆跡から、芭蕉によるものであらうと推量する。「曾良本」「おくのほそ道」の補訂について(補遺)は、「曾良本」の補訂が素龍かどうかを問題にしている。その際、検証には字母や筆跡、墨のかすれ具合までが問題になる。「中尾本」「おくのほそ道」における誤記の問題」は、芭蕉自筆本における誤字を検討し、芭蕉の体力の衰え始めた時期との一致を指摘する。「櫻井武二郎氏紹介」「新出猿蓑歌仙」の検討」は、新出の「猿蓑歌仙」は贋作であらうことを考証したものの、「葺の羽歌仙」成立の時期」は、歌仙が成立したのが、元禄三年十一月か、九月二十八日以前かについて考証している。「本朝文選」所収「松嶋ノ賦」について」は、「松嶋ノ賦」が芭蕉の真作であり、元禄三年頃の成立であることを論証している。「伝芭蕉写」「蘭太暦」の書写年次」は、書体から芭蕉の書写とし、仮名の使用状況から元禄三年と考証する。「芭蕉偽簡考―工山宛・昌房宛など」は、工山宛・昌房宛の芭蕉の書簡が何れも偽物であることを論証する。「芭蕉書簡の検討―貞享四年四月三日付桐葉宛書簡」は、芭蕉の書簡の真贋鑑定を述べたもの。「芭蕉筆跡学への展望」は、芭蕉の筆跡を識別するために、普段から影印本や原本のコピーに接し、芭蕉の肉筆史料を臨模し、かつ読解力を身につけなければならないとしている。「芭蕉の作品における暦の問題」は、年内立春を中心に陰暦と太陽暦との季節感の違いを問題にしている。「芭蕉と宗七」は、宗七が青年時代の芭蕉の人格形成に少なからぬ役割を果たしたとする。「芭蕉と宗七(補遺)」は、宗七関係の資料として書簡を紹介する。「芭蕉の深川移住―横浜説の検討」は、延宝八年の冬に芭蕉が深

川に移住したのは火事のためであるという仮説を批判したものの。「芭蕉の老後」は、芭蕉の老後は、四十歳過ぎに始まり、当時は老後の始まりとされた五十一歳で没したことの意味を考察する。「芭蕉晩年の苦悩」は、芭蕉の「亀子が良才」という俳文を解釈し、それに基づいて芭蕉の老後の心境を探っている。「深川」注釈―「青くても」の巻―」は、芭蕉の連句の注釈。「鶏肋編」は掌編を選りすぐったもので、無用な要約は避けたいが、「芭蕉と漢詩文」について一言述べたい。ここでは、芭蕉が「円機活法」のような類書や「杜律集解」といった注釈書に拠らず、「古文真宝前集」といった俗本を参照したとされ、「旅に病で夢は枯野をかけ廻る」の「夢はかけ廻る」という言い方も中国の詩でよく用いられるものであることを例証している。

紹介するのが最後になってしまったが、「あとがき」もおもしろいことを付言しておく。是非一読を薦めたい内容である。田中先生、ありがとうございます。

(平成二十一年五月二十日刊 四六判 四四六頁 新典社)